翻訳を通じて英語の特質を学ぶ
―翻訳入門講座の試み―

堀（山口）　緑*

はじめに

英語の授業のなかで、直訳と意訳のどちらのほうがいいのか、という質問を受けることがある。特に試験前になると、毎年のように「訳す場合は意訳と直訳のどちらがいいのか」と質問する学生が現れる。そういう学生は、意訳をすると構文や熟語がわかっていないと思われるのではないか、と不安に感じているらしく、結局直訳をしたほうが安全だと考えるようだ。英文の構造を確認しながら行う直訳は日本語として不自然なものにならざるを得ないのだが、英語の授業のなかでは、必要悪として直訳の不自然な日本語がまかり通ってしまう場合がある。なかには、学生が自分で訳した日本語の内容が理解できていないことさえある。発表し終えた学生に、「で、結局それはどういうこと？」と尋ねると、訳した本人も首をかしげてしまうのだ。構文は理解できていても、全体の意味内容を考えずに辞書の一番目の意味ばかりを並べるので、意味不明な文ができてしまうのだろう。問題は、内容がつかめていないのに、外国語の訳だからわかりにくくて当然だと学生たちが考え、それで平気でいることであろう。

このように、意味不明の日本語訳を作るところまでで終わってしまい、肝心の内容を理解していなくても平気でいたのでは、いつまでたっても英文は読めない。日本語訳を作るのなら、むしろ極力自然な日本語に意味内容を移す作業――つまり翻訳――をしたほうが、内容理解に結びつくのではないだろうか。また、翻訳作業をするためには、英語を読むだけでなく、英語と日本語の違いを知らなければならない。英語と日本語の違いを知れば、英語に対する理解もいっそう深まるのではないだろうか。

もちろん、多読や速読をする際にいちいち翻訳作業をするわけにはいかない。ある程度の分量の英文をある程度の速度で読もうと思えば直読直解が必要なのは当然である。だが、英語の

＊教職教育部助教授

構造や文法を学ぶうえで英文解釈というものが必要になるのなら、直訳で終わらず、一歩踏みこんで日本語に移す工夫をすることで、英語という言語の理解が――そして、日本語の理解も――一層深まるのではないだろうか。

筆者はここ数年、ある大学で翻訳の授業を担当してきた。そのなかで、最初は英文解釈と翻訳はどう違うのかととまどっていた学生たちが、やがて生き生きとした訳文を作りはじめる様子を目にしてきた。本論では、筆者が行ったある翻訳入門の授業を取り上げ、学生たちの訳文の変化を追いながら、翻訳を通して英語と日本語の特質を学ぶ試みについて考えてみたい。

1　授業の実際

本論では、授業例として、平成17年度秋学期に行なった「翻訳入門講座」を取り上げる。このクラスは、関西のある私立大学の経済学部で、2年生の秋学期を対象として提供されている「英語演習」という科目のなかで開講したものである。この「翻訳入門講座」はそのうちのスペシャル・イングリッシュという分野のひとつとして開講した。

1）クラス構成

この「英語演習」では、クラスは選択制となっており、定員枠はあるものの、学生は希望のクラスを選ぶことができる。平成17年度秋学期は、筆者の「翻訳入門講座」クラスに25名が登録した。ただ、受講生はすべて経済学部の学生であり、英語や英米文学を専門とする学生ではない。そのため、はじめから翻訳が学びたくて履修した学生より、翻訳とはどういうものか、英文解釈や直訳とはどう違うのか、という疑問を持って履修した学生のほうが多かったようだ。もちろん、第一希望のクラスにはいれなかったので、という学生もいた。初回の授業でこのクラスを選択した理由を書いてもらったところ、次のようなものがあった。

- 「ただの直訳ではなく普段話しているような言葉を使ってスムーズに訳せるようになりたいと思ったから」
- 「直訳と翻訳はどんな風に違うのかは気になっていました」
- 「翻訳について私は直訳との違いは何か？　直訳から翻訳に変えていくにはどのようにすればいいのかを学べたらいいなと思っています」

・「今まで受験とかの英語で自分自身が訳してきたカチコチの訳を捨ててやわらかい？訳というものがスラスラできるようになりたい」
・「なんかいいかげん長文読解は飽きたので、目新しい事がやりたかったから」

学生たちのなかには、やはり自分たちの普段の英文訳は直訳であって、スムーズではないという意識があるように見受けられた。

2）教材

翻訳の授業をする際に苦労する点のひとつが教材選びである。翻訳を本格的に学びたい人のためのもの、翻訳学校で使われた教材を本にしたもの、翻訳についてのエッセイなどはかなりあるのだが、翻訳を扱った大学生向けの英語テキストは数が少ない。今回は『Deep Reading――読みから訳への要領』(英宝社）を使用した。このテキストは文法項目ごとに章が分けられており、テキストの例文や練習問題の英文はホーソン、サリンジャー、カポーティーなどの文学作品から採用されている。学生たちは普段文学作品を読み慣れていないうえ、少し古い作品が多いので堅苦しい英文だと感じるだろうが、文法的にきちんとした英文が多く、文法の解説が加えられている点、また、練習問題の分量が少ない点で初心者には使いやすいテキストだと思われる。さらに、教師用のマニュアルには実際に出版された翻訳が採録されていて、原文と訳文の比較ができる点でも便利であった。

3）基本的な授業方法

この授業では、基本的に毎回翻訳課題を小レポートとして提出させることにした。第一回は導入として授業の進め方を説明し、さらに翻訳の現状や翻訳家が実際に翻訳を行なう手順などについての講義を行う。第二回はあらかじめ提出された課題レポートの講評ができないため、ほかの素材を用意するなど、少し構成が違うが、第三回以降の基本的な毎回の授業展開は次の通りである。

①前回の課題文を読み、内容を正確に理解する。文法説明なども行い、まず学生に直訳させる。
②前週提出された添削済み翻訳レポートを返却する。

③うまく訳せていた6、7名の訳文を一覧できるプリントを作っておき、それぞれ訳者に発表させる。また、うまく訳せている点、もう少し工夫したほうがよい点など、教師がコメントを加える。さらに、各人の訳文の比較も行なう。

④次の課で取り上げる文法項目の解説や問題演習を行なう。

⑤テキスト以外の素材の翻訳など応用演習を行なう。

この授業の一番の狙いはステップ②にある。添削済みのレポートを返却するだけでなく、6，7名の訳文を配布することにより、学生たちは、他の学生がどんな訳をしているのか知ることができ、お互いに刺激しあうことができる。本当なら全員の訳文を共有できればいいのだが、翻訳の演習クラスとしてはクラスサイズが25名と大きいため、毎回プリント一枚に収まる6，7名を目安にした。

だが、このステップ②は、長所であると同時に苦労する点でもある。教師は毎週提出された訳文を一週間で添削してすべてにコメントをつけ、優秀作を選び、それをまとめたプリントを作らなければならない。毎週この作業をしなければならないのはかなりの負担であった。

また、試験は行わず、その代わりに学期末レポートとして短編をひとつ翻訳させることとした。

3　翻訳のコツといわれるもの

学生たちの実際の訳文を見るまえに、まず翻訳を教えるということについて少し考えておきたい。以前、拙論「翻訳を考える――翻訳をめぐる現状報告」でも述べたように、翻訳を扱う学問としての「翻訳論」から、翻訳家志望者向けの実践的翻訳指南書まで、「翻訳」はさまざまなレベルで語られている。[1]　当然ながら、翻訳の授業についても、その授業が行われる学校の種別、さらにはクラス編成や授業目的によって、さまざまな内容が考えられるであろう。翻訳学校や大学の英文科などの授業で「翻訳論」が講じられる場合もあるだろうし、翻訳学校の翻訳家志望者を対象に、かなりの分量の課題をこなせることを前提に実践的な授業が進められる場合もあるだろう。今回取り上げた授業のように、一般教養の英語クラスとして開講され、実際の翻訳作業を中心とするとはいえ、課題はわずかな分量にすぎない場合もある。

ただ、どのタイプの授業であっても、おそらく必ず登場するのは「翻訳のコツ」や「翻訳の

テクニック」といわれるものではないだろうか。半期十数回の限られた授業回数のなかで受講生に少しでも翻訳らしいものを経験させようと思うと、翻訳作業を繰り返すうちに自然とコツを体得するまで待つなどという悠長なことはしていられない。どうすれば翻訳らしくなるかを提示することになる。翻訳家志望者を対象とする場合も事情は同じらしく、多くの実践的翻訳指南書でも「翻訳のコツ」が取り上げられている。たとえば、次のような具合である。

自然で，わかりやすく，リズムもある訳文を書くために注意すべきこととして，どんな翻訳技法の本にも似たり寄ったりの注意が示されている．

◆代名詞はできるだけ少なくせよ．

◆「. . . と言った . . . . と思った . . . . だった. . . . だった」のように，単調な語尾を避けること．

◆この文のなかの「こと」のように，ひとつの文章のなかで同じ言葉を繰り返すことも，なるべく避けることが望ましい．

◆「. . . なのだ」という押しつけがましい言い方は，時に効果的だが，決して乱発してはならない．

◆文章を引き締める効果があるからといって（例えば「非の打ちどころがない」のように，現在もよく使われている古い表現はかまわないけれども）「間然するところがない」のような古風な表現や漢字熟語を乱用しないこと．

◆長い原文はいくつかの短い文に分けて訳す．[2]

今回使用したテキストの章立ても、「代名詞はすべてを訳す必要はない！」「名詞を動名詞のようにして考える！」「受動か能動か名詞に隠された方向性を探る！」などとなっており、章ごとに翻訳のテクニックが文法説明とともに紹介されている。

だが、この「翻訳のコツ」といわれるものについて改めて見てみると、そのいくつかは、日本語の特質を端的に表しているのに気づく。日本語が「文法上の主格を必ずしも必要としない，代名詞（人称代名詞，指示代名詞）をかなりの程度切る（隠す）ことが出来る言語である」[3]といわれているのは言うまでもない。そもそも「彼」「彼女」という言葉は翻訳語として日本語にはいりこんできたものであり、[4]「彼」「彼女」をなるべく使わずに翻訳しようと努力している翻訳家も多いのだ。「日本語の基本文において、人称代名詞は初めから不要なのである。

主語や目的語がなくては文法的な文にならない英（仏）語であるから、人称代名詞がなくては困るのだが、それは日本語にはまったく関係のないこと」だという説もあるほどである。[5] また、英語の小説の地の文は過去形で語られるのが約束事になっているが、日本語では文末に変化を持たせるのが普通だ。文尾をすべて「……た」「……だった」としたのでは、日本語としては単調で読みづらいものになってしまう。

このような点を考えても、翻訳について考えるということは、すなわち日本語について考えることであり、同時に翻訳される側の言語（今回の場合は英語）について考えることだというのがわかる。では、翻訳についての授業を受けた学生たちはどうだったのだろうか。授業を通して日本語と英語の特質に気づいてくれたのだろうか。次に、実際の訳文の変化を見てみたい。

4　実際の訳文から

テキスト第一課の翻訳課題は、Capote の“A Tree of Night”の一節から取られた次のような一節であった。

> Kay, seeing it was useless, decided to succumb and avoid a possible scene. She sipped and shuddered. It was terrible gin. It burned her throat till her eyes watered. Quickly, when the woman was not watching, she emptied the cup out into the sound hole of the guitar.

一行目のitは「すすめられた酒を断ること」を指すという注がついている。翻訳の課題としては短いかもしれないが、学生たちが文学作品を読み慣れていないこと、はじめて翻訳に挑戦することを考えれば、訳すのに苦労するのではないかと思われた。また、課題として一部を抜き出すのだから仕方ないとはいえ、前後関係がわからないまま訳すのはとてもむずかしい作業である。第一回目の授業の最後に、この英文を「翻訳」して次週提出するように指示した。その結果提出された訳文の一部を数人分見てみたい。

学生A　ケイはすすめられた酒を断ることが無駄だと分かっていたので、その誘いに負け、起こりうる騒動を避けることに決めた。彼女は酒を少し飲み、身震いした。それはきつ

いジンだったのだ。その酒は目に涙がうかぶほどまで喉を焼いた。

学生Ｂ　ケイはすすめられた酒を断ることはできないということを悟り、酒を飲もうと決心し、騒動になるのを回避しようとした。彼女は酒を少しずつ飲んだ。すると、震えだした。その酒はきついジンであった。ジンを飲むと、彼女は涙が出るほど、喉が熱くなった。

学生Ｃ　ケイは、すすめられた酒を断っても無駄だと思い、酒を飲んで騒動になることを避けようと決めた。彼女は少しずつ飲むと、震えだした。それはとてもきついジンだった。すると、彼女の喉は涙が出るほど熱くなった。

学生Ｄ　ケイはすすめられた酒を無闇に断る理由など無いと考えて、誘いに屈し、断った場合の面倒な事態を避けようと決めた。彼女は酒を少し飲んで身震いしたきついジンだ。彼女は目に涙を溜めるほど喉が熱くなった。

学生Ｅ　ケイはすすめられた酒を断るのが無駄だとわかったので、あきらめて起こりうる騒動を避けようと思った。彼女は一口飲むと身震いした。ひどくきついジンだったのだ。のどは燃えるように熱くなり、目から涙まで出てきた。

どの訳文も、ほぼきちんと英文解釈できている。また、「翻訳」として訳すようにと指示したため、“to succumb”を「その誘いに負け」「誘いに屈し」と言葉をおぎなって訳したり、逆に「酒を飲もう」「酒を飲んで」と意訳をするなどの工夫も見える。特に学生Ｄの訳文には、「きついジンだ」と主語を省き、現在形に訳した文を交えるなど、日本語らしくしようという意欲が見える。しかし、どの訳文も「彼女は」「それは」などの主語がほとんどすべて訳出されており、「起こりうる」「回避する」など、辞書からそのまま借りてきたような語彙が目につく。まだまだ代名詞を省くことができるはずであるし、「断る<u>こと</u>はできないという<u>こと</u>を悟り」のような語彙の重なりに気づいていない訳文もある。

次に、同じ学生たちの三回目の課題を見てみたい。クラスでは、代名詞はすべて訳す必要はない、という「コツ」をすでに学んでいる。課題文はHemingwayの*A Farewell to Arms*からの一節で、“It was bright sunlight in the room when I woke. I thought I was back at the front and stretched out in bed. My legs hurt me and I looked down at them, still in the dirty bandages, and seeing them knew where I was.”という部分である。

学生A　目覚めると部屋には明るい陽の光が差し込んでいた。これから戦争の前線に戻ることを思い、ベッドで少し背伸びをしてみた。そのとき、足に激痛が走った。思わず見下ろすとそこには汚れた包帯が巻かれていた。そこでやっと、私は自分が病院にいることを悟ったのだった。

学生B　ヘンリーが目を覚ましたとき、明るい太陽の光が差し込んでいた。ヘンリーは考えた。自分が前線の後部にいたことを。そして、ベッドの上で伸びをした。その時、足に痛みを感じたので、見てみた。足には汚れた包帯が巻いてあった。それで、自分が病院にいることに気づいたのだ。

学生C　起きた時、部屋は太陽で明るく照らされていた。戦争の前線に戻ったから、ベッドに横になっているのだと思った。足が痛んだので見下ろしてみたら、まだ、汚い包帯にまかれていた。そして、自分がどこにいたのか分かった。

学生D　目覚めると、明るい日差しが部屋に射し込んでいた。私は前線に戻ったのだと思い、ベッドに俯せる。足がズキズキ痛み、それを見下ろすと、未だ汚れたバンデージが巻かれたままだ。私はようやくどこにいるのかを知った。

学生E　目が覚めると、部屋に太陽の光が輝いていた。ベッドで手足を伸ばすと戦地に戻っているのかと思った。足が痛むので見下ろすと黒ずんだ包帯をつけていて、それらを見て自分がどこにいるのか気づいた。

読みの正確さは別として、わずか三課目で訳文から「わたし」がほとんど消えつつあるのがわかる。学生たちは、「わたし」「わたしの」を省略する、あるいは「自分」という表現を使うなどして、“I”や“my”を処理しようとしている。「わたしは、わたしが」と書かなくても、いや、むしろ書かないほうが、自然な表現ができると気づいたのだ。また、学生Bの訳文には突然「ヘンリー」が出てきて驚かされるが、これはテキストに、戦争で負傷したヘンリーが目を覚ました場面だというヒントがついているからである。この訳文の良し悪しは別として、翻訳を意識する前には、こんな大胆な訳は生まれなかっただろう。

続いてChapter 4の課題を見てみよう。学生たちはこの課で、所有格には所有を表す働きがあるのはもちろんだが、主格の関係や目的の関係などを表す場合もあることなどの「コツ」を学んでいる。参照する部分はHawthorneの“The Artist of the Beautiful”からの次のような一節である。

"Well, Owen," said he, "I am glad to hear such good accounts of you from all quarters; and especially from the town-clock yonder, which speaks in your commendation every hour of the twenty-four. . . ."

学生Ａ　時にオーウェン、街のあちこちから聞こえるお前の良い噂を私は嬉しく思うよ。特にあそこの街の大時計が一日中毎時ごとに時を刻んでいるのは、まさにお前の功績の表れだ

学生Ｂ　なぁ、オーウェン、わしは、あちこちからお前に対するとても良い評判を聞くと嬉しい限りだよ。特に町の大時計のところでは24時間のうち毎時間お前を褒め称える声が聞けるよ。

学生Ｃ　ところで、オーウェン。私はあなたの良い評判をあちこちから聞くことがうれしい。とりわけ、向こうに見える町の大時計については、四六時中あなたの賞賛している。(原文ママ)

学生Ｄ　「オーウェン…」彼は言った。「私はあちこちからおまえの話を聞いて嬉しいよ。特に四六時中おまえを称賛している向こうの時計台からには。(原文ママ)

学生Ｆ　オーウェンよ、あちこちからお前の良い評判を耳にしてとても誇りに感じておるぞ。特に町の大時計については、賞賛の声がひっきりなしに聞こえてくる。

セリフの訳だということもあって、学生たちは楽しみながら訳しはじめているように見える。テキストには、このセリフは時計屋の親方のものだというヒントがついているので、「お前」「わし」など、人称代名詞を工夫している者もいる。人称代名詞を省略してしまうとこのような工夫ができないので、省略はあまり行われていない。また、"every hour of the twenty-four" という原文を、「四六時中」と日本語らしい表現に置き換えている者もいるが、こう訳すと「一日中ずっと」という意味になり、"every hour" の意味が消えてしまうわけで、このあたりが翻訳のむずかしいところである。

さらに、六課目を見てみよう。課題文はMurdochの *The Bell* から取られており、訳文を参照するのは、そのうち "She turned towards her seat. A large elderly lady shifted a little to make room." という部分である。

学生A　席へ戻ると、場所を空けようと体の大きな初老の婦人が少し席を詰めてくれた。

学生B　自分の席の方へ向いた。身体の大きいおばあさんが場所を空けるために移動してくれた。

学生D　彼女は座っていた席の方へ向いた。大柄のおばさんが隙間をつくろうと少し詰める。

学生F　ドーラは自分の席のほうを向く。すると大柄な年老いた女性はスペースをつくるために僅かにずれてくれた。

学生G　ドーラは座席の方へ向きを変えた。大柄な老婦人が少しずれて隙間を作ってくれている。

学生H　ドーラは席に戻っていった。太った年配の女性が体を動かし席を詰めてくれた。

ここで注目したいのは、学生D以外の学生たちが2文目の文末を「～くれた」と訳していることである。英文は“A large elderly lady shifted a little to make room.”であり、「～くれた」に対応する部分はない。英語の場合はこれでまったく問題はないのだが、この場面はドーラという女性から見た場面であり、「日本語は『視点』にかなり敏感である」とともに、「『恩恵の授受』にも敏感」なところがあるため、「他人が話し手（及び話し手にとってウチである人）にとって恩恵となる行為をした場合には『てくれる』をつけることが必要」だと言われている。[6] 筆者は何度か授業中に視点の問題に触れ、誰から見ている場面か気をつけるようにとアドバイスをしたが、それをきちんと吸収してくれた学生がかなりいたということであろう。

5　学生の感想

以上見てきたように、わずか十回足らずの演習のあいだに、学生たちは英語と日本語の特質の違いをいくつかの「翻訳のコツ」という形でつかみ、日本語らしい表現をしようとしはじめたように思える。では、学生たち自身はどう感じていたのだろう。最後に感想を書いてもらった。その感想のなかから、一部抜粋して紹介したい（すべて原文のまま）。

・直訳というものを受験時まで心がけてきていたのですが、内容が訳にともなっていないことに違和感を感じていました。その疑問にこの演習は答えをもたらすキッカケになったと

思います。

- 直訳と違って翻訳は文脈を全体が通るようにうまく訳さなければいけなかったので、大変でした。
- 正直、ずっと英語の授業は形式的にただ直訳していくだけでマンネリ化してて飽きてたので、自由に訳せるこの授業は新鮮でした。
- 直訳だとどうしても「これでいいや」とかいうふうになってしまうのですが、翻訳だと語尾に気を付けたり、いろいろ考えなければならない部分がたくさんあり、「英語」というものがとても楽しく思えました。
- 今まで英文を読む時、だいたい読めていればいいかな？という程度で読んでいたのですが、毎回添削をしてもらううちに、英文を正確に訳して、またそれを翻訳してわかりやすく書くという事の難しさを知りました。
- レポート（毎回のものと、最後のもの含め）が割と大変だったけど、いつもの直訳とはまた違ったスタンスで訳すので、おもしろい経験だった。
- 翻訳は、文の前後の流れをみて考えないといけないし、前後の流れを考えてたら文の意味がわけわからなくなってしまったりと本当に難しいものだと思いました。
- 翻訳は初めてしたのですが、もちろん直訳だけも時間がかかり大変でした。ただそれ以上に、日本語の難しさ、深みをとても感じました。私は日本人でありながら自分の表現したことを日本語ですら表すことができないのが痛感しました。
- 日本語ってこんな数多くの言いまわしがあるんだという新たな発見もあって、良い刺激のある授業＆試験でした。楽しかった。

「内容が訳にともなっていない」「形式的にただ直訳していくだけ」「直訳だとどうしても『これでいいや』とかいうふうに（なる）」と感じていた学生たちが、文脈や前後の流れを考えながら翻訳を試みるうちに、「考えなければならない部分がたくさんあり」「日本語の難しさ、深みをとても感じました」と書いているのを見ると、英語だけでなく、日本語の難しさやおもしろさにも気づいてくれたことがうかがえる。そして、「新鮮」だった、「楽しく」思えた、「新たな発見」があったという感想は、英文解釈と翻訳に違いがあることを改めて感じさせてくれる。

このように学生たちは。英語を正確に読むだけでなく、その内容を日本語に移し替えるとい

う作業を通して、改めて日本語と英語の違いや、日本語の表現について考える機会を得てくれたようである。もちろん個人差はあるのだが、単なる直訳で終わらずに英文の意味内容を理解してほしい、それとともに、英語と日本語に対する理解を深めてほしいというこの授業の当初の目的は、ある程度達成できたのではないだろうか。

終わりに

以上見てきたように、訳読に翻訳という作業を取り入れることで、日本語と英語の違いを意識し、日本語だけでなく英語への理解を深めることが可能だと思われる。英語を機械的に直訳していたのでは、英語と日本語の構造や性格の違いはなかなか見えてこないものだが、「日本語の性格を知ることは外国語の勉強に役に立つ」[7] と言われているとおり、日本語らしい表現に置き換えるというステップを踏むことで、逆に英語の特性がよく見えてくるからだ。

そしてその英語の特性に関する知識は、英語を日本語に訳す場合だけでなく、日本語を英語に訳す場合にも役立つはずである。英語と日本語の違いが頭にあれば、英語を書く際にも、日本語にはない主語を補うことや、人称代名詞を補うことが自然とできるようになるだろう。

今回は「翻訳入門講座」として行った授業を考察したが、翻訳以外の講読の授業にも、この「直訳ではなく翻訳を心がける」という姿勢を取り入れることは可能であろう。翻訳という作業を取り入れることによって、ともすればマンネリ化しがちな英語を読むという作業を活性化することも可能であると思われる。今後も、直読直解、直訳、翻訳などのうち、どれかひとつの読み方に偏ることなく、さまざまな読み方訳し方を取り入れることで、英文を読む授業を工夫していきたい。

注

[1] 堀（山口）緑「翻訳を考える――翻訳をめぐる現状報告――」『近畿大学教育論叢』第10巻第1号、pp. 55～67.

[2] 飛田茂雄『翻訳の技法』（東京、研究社出版、1997）p. 118.

[3] 井上　健「必要悪としての学校文法」『翻訳の方法』川本皓嗣、井上健編（東京、東京大学出版会、1997）、p. 24.

[4] 柳父　章『翻訳語成立事情』（岩波新書、1982）

[5] 金谷武洋『日本語に主語はいらない』(東京、講談社、2002)、p. 51.

[6] 庵　功雄『新しい日本語学入門――ことばのしくみを考える』(東京、スリーエーネットワーク、2001) p. 123.

[7] 金田一春彦『日本語の特質』(東京、日本放送出版協会、1991) p. 11.